

# シラー『美的書簡』における「遊戯衝動」

——ゲーテ文学からの解明——

井 藤 元

## 1. はじめに

フリードリッヒ・シラー (1759-1805) が自らの美的教育論を展開した『人間の美的教育についての書簡 (Über die ästhetische Erziehung des Menschen 以下『美的書簡』)』(1795) は、教育学の古典的テキストとして不動の地位を築いており、遊びと人間形成について論じられた数ある論考の嚆矢をなすものとして高く評価されてきた。しかるに、教育学の古典としての地位に君臨しながらも、『美的書簡』は読者を混乱へと導く多くの矛盾、分裂を内包しており、統一的、整合的解釈が提示されているとは、およそ言い難いテキストである。本研究では、そうした難テキストたる『美的書簡』解釈に際し、ある「事実」を手掛かりとした解説を試みる。その「事実」とは、極度の抽象的内容を示す『美的書簡』がゲーテを描き出しているという事実だ。『美的書簡』はこれを抽象的次元に留めた場合、(このテキストが多くの矛盾、分裂を孕み解説困難であるがゆえに尚更)無限の解釈を許すこととなる。ところが、シラーはゲーテとの往復書簡において『美的書簡』はゲーテを描いた「肖像画」として言明している。シラーが『美的書簡』に込めたイメージは他でもない具体像としてのゲーテであるというのだ。この前提のもと、本研究は具体(ゲーテ像)によって、抽象(『美的書簡』)レベルでの解釈の浮動を凝固させることを目論む。具体レベルにまで抽象概念を引き下ろすことによって始めて『美的書簡』の諸概念の内実が確定できよう。本論文では、『美的書簡』に登場する様々な抽象概念のうち、特に、重要概念たる「遊戯衝動」に焦点を当てることにする。「遊戯衝動」概念の把握はテキスト全体を理解する上で不可欠であるものの、抽象度の高さゆえに、論者によってその理解は微妙に、ときに大きく異なる。「遊戯衝動」を具体像のうちに描き出すことで、その内実は明瞭に理解可能になるはずである。本研究では、ゲーテの文学作品のうち

に、「遊戯衝動」概念を還流させ、その具象化を図りたい。

## 2. 『美的書簡』解釈はなぜ困難か

数多くの思想家、芸術家、作家等から高く評価される『美的書簡』に対しては、賛辞と同様(かそれ以上)、多くの批判も浴びせられてきた。シュブランガーは『美的書簡』はシラー哲学の中で最も難解なものであり、ドイツ哲学の中でも最も難解なものの一つである<sup>1)</sup>という指摘と共に、シラー哲学は、誰もが認めざるをえないような矛盾にみちている<sup>2)</sup>と述べ、シラーの哲学的著作における思想的不一致や矛盾を検証することは、きりのない作業であるという。

その難解さと内容の矛盾に対し、発表当初から<sup>3)</sup>現代に至るまで『美的書簡』批判は繰り返しなされておられ、枚挙に暇がない。『美的書簡』の読解を困難ならしめている要因はいくつか考えられるが、第一に、このテキストがシラー特有の詩的表現と極度の抽象的表現の融合により<sup>4)</sup>、文学研究者にとってはあまりに哲学的で思弁的であり、逆に哲学研究者にとってはあまりに詩的すぎる<sup>5)</sup>ことがその要因として挙げられる。『美的書簡』が純粋な哲学ではなく、そこに詩的要素が多分に流入していることで、文学、哲学双方の手に余るテキストとなっているのだ。また、長倉はシラーの諸々の美学論文において、論文ごとに新たな術語が使用されることがシラー哲学の全体像の把握を困難にすると指摘する<sup>6)</sup>が、「論文ごと」に止まらず、『美的書簡』という単一の論文の内でさえ、突如前出の術語が新たな術語によって言い替えられること(これにより読者は不断の概念の変転に混乱を余儀なくされる)もテキストの難解さを助長していると思われる<sup>7)</sup>。この点に関し、シュタイガーは「数多くの曖昧な言葉や、断言的で、しかし必ずしも信頼しえない数々の結論ゆえに、すでにそれだけで無数の注釈者がまったくの絶望に陥<sup>8)</sup>」

ていると述べ、「自由」とか、「形式」とか、「自然」とかいう言葉で何を理解すべきかは、そのつど繰り返し、初めから確定してかからなければならない<sup>9)</sup>と指摘する。

最大限の賛辞を受ける一方、他方ではこの上ない批判が浴びせられており、『美的書簡』への評価は両極的である。その内容分析に関しても、解釈は多様である。『美的書簡』をめぐる現状に鑑み、西村は以下のように述べる。

「一義的な解釈を容易に許さないテキスト故に、いくつもの論点に関して非常に多様な、ほとんど180度異なったものを含む読解がなされてきた。それらに関して、どれが「本当の」シラー解釈なのか、シラーの「真意」は何か、といった問いを立てるとしたら、それはもはや素朴に過ぎるであろう<sup>10)</sup>」

以上の指摘からは、もはや『美的書簡』におけるシラーの「真意」解明はほとんど不可能にさえ思われる。

### 3. 「ゲーテ—シラー往復書簡」におけるシラーの告白

『美的書簡』の真意を追求するという試みが、「もはや素朴に過ぎる」という、上に引用した西村の指摘は、その膨大な先行研究を目の当たりにすれば、誰もが受けざるを得ない印象である。しかしながら、シラーの「真意」解明は極めて困難ではあるが、その解明の糸口が無いわけではない。「ゲーテ—シラー往復書簡」における一通の書簡が『美的書簡』の真意解明のための重要な手掛かりとなる。1794年10月20日にシラーがゲーテに書き送った書簡には、シラー自身の言葉で『美的書簡』の真意の在処が記されているのだ。

「あなたはこの『書簡』の中で、あなた御自身の肖像を発見なさることでありましょう。もし私が頭のいい読者の感情に先回りすることをいとわないならば、この肖像画にあなたのお名前を書き込んでおいた事でしょう。あなたのために価値ある程の判断を有している者は、一人としてこれをあなたの肖像であることを見誤らないのです。というのは、私はあなたを十分よくつかみ十分よく描き得たと信じていますから<sup>11)</sup>」

シラーは『美的書簡』が「ゲーテ自身の肖像画」であることを告白する。ゲーテはシラーからの書簡

に対し、10月28日早速返事を送る。

「ここにあなたの『美的教育の書簡』を、感謝をもってお返しいたします。はじめ私は観察者として拝見し、そして多くの殆ど全部といってもいい程あなたの考え方との一致を発見しました。二度目に私は実践者のところで拝見しました。そして実践者としての自分がこの道から逸れるものがあるかどうかを厳密に観察してみました。然し又その時にも、只管に元気づけられ励まされていることがわかりました。それで私たち二人の心のこの調和を自由な信頼を持って喜びたいと願っています<sup>12)</sup>」

『美的書簡』を読んだゲーテは、その内容を分析的視点、経験的視点の双方において受容していたことがこの書簡から窺える。さらにゲーテは別の書簡において、「高貴な、我々の天性に合った飲料は、心地よく咽喉を落ちて行き、神経に微妙な感じを与えて健康に良い効果を舌の上に残すように、この『美的教育の書簡』もまた、只々愉快的心地いいものであります。そうしてこれは外ならず私が以前から正当だと認識していたこと、私が一部は称賛し、一部は称賛しようと望んだことが、系統立った高貴な方法で講述されているのを見たからであります<sup>13)</sup>」と述べ、『美的書簡』に対し、自らの思想との一致を示している。ゲーテとシラーはそれぞれ具体—抽象と表現方法を異にするが同一の事態を描き出すことを目指した。このことをシラーはゲーテに書簡で訴える。「私がその中『『美的書簡』 註：筆者』に吐露してある告白は、余計なものはいっているとは思われません。あなたと私が用いている道具が、如何に異なっても、また、私達が取っている攻勢と防御の武器が如何に違うものであっても私たちは同一の重点を目的としていることを私は信じています<sup>14)</sup>」。

さて、往復書簡におけるシラーの告白(『美的書簡』は「ゲーテの肖像」である)には、シラーにこの言葉を言わしめる伏線、前段階が存在する。シラーが雑誌「ホーレン」に掲載のため『美的書簡』の執筆に取組んだのは1794年9月であった。これに先立ち7月半ばには、芸術および芸術理論に関するゲーテとの詳細な対話があり、シラーが友人ケルナー宛ての書簡で述べているように、この対話においてシラーとゲーテの間に意見の一致が見られたのである。「この一致は非常に相違する見地から出てきたものであるだけに一層興味あることであった。めいめ

いが相手に不足しているものを与え、その代りに自分の方に不足しているものを受け取ることができた。この時から、これらの散漫になっていたイデーは、しっかりとゲーテの心に根を据えたのである。そして彼は現在、これまで唯ひとりで励ます人もなく歩んできた道を、私と一緒にあってつづけてゆく必要を感じている<sup>15)</sup>。さらにシラーは9月に2週間にわたってゲーテ家に滞在する。この滞在での対話に関し、シラーは次のように述べる。「あなたが私の心にかきたててくれたすべてのイデーを整えるには、相当の時日が要ることでしょう。が、その一つも失いたくないと思っています<sup>16)</sup>。これに答えてゲーテは、「私達は今2週間の談合から、二人が原理の上で一致していること、二人の感覚・思索・仕事の範囲はある部分は一致しある部分は接近していることを知りました<sup>17)</sup>」と応答する。往復書簡におけるシラーの告白(『美的書簡』は「ゲーテの肖像」である)の一ヶ月前にゲーテ、シラーは2週間の談合により、既に互いの理念の一致を見出しているのである。

また、『美的書簡』は「ゲーテの肖像」である」というシラーの告白の正当性は、彼の美学論文の内容の変遷からも裏付けが可能である。1794年、イェーナの自然研究協会の会合でゲーテと出会う以前、1793年にシラーが発表した美学論文『優美と品位について (*Über Anmut und Würde*)』とゲーテとの交流を経て発表された『美的書簡』の間にはシラーの根本的思想に変化が見られる。『優美と品位について』では見られない、もしくはこれに矛盾する思想が『美的書簡』において見られるのである<sup>18)</sup>。

『美的書簡』への賛辞の時とは対照的に、ゲーテは『優美と品位について』の内容に不満を抱いている。ゲーテは、シラーが『優美と品位について』のうちに天才を構成美との類似において捉えたことについて、それが自分に向けられた非難だ(それは結局ゲーテの誤解にすぎなかったのだが)と思ひ込む。とりわけ『優美と品位について』の以下の一節はゲーテを憤激させた。「構成美と同じく、天才もまた単なる自然の産物であって、手本どおりに模倣できぬもの、努力しても獲得できぬものを最も高く評価する人々の誤った考え方によれば、魅力よりはむしろ美が、後天的な精神力よりはむしろ天才が賛美される。これら自然の寵児はいずれもその無作法さ [...] にもかかわらず、一種の世襲貴族、閥族とみなされてい

る<sup>19)</sup>。この「自然の寵児」をシラーが「一種の世襲貴族」と呼んだこと<sup>20)</sup>が、ゲーテを憤慨させたのである<sup>21)</sup>。小論「シラーとの出会い」においてゲーテは、『優美と品位について』に関し、次のように述べる。『『優美と品位について』というシラーの論文も、私の心をなごませる手段とはならなかった。[...] シラーは自由と自律の最高の感情にとらわれて、彼をなんら継子扱いにしていない偉大な母なる自然に対して忘恩的であった。[...] 論文のいくつかの手厳しい箇所は、直接私にむけられているように思われた。それらの箇所は、私の信条に見当違いの照明を当てていた。こんな場合私は、それが私に関係なく言われた言葉であるとすればなおさら質が悪い、と感じた。というのも、われわれの考え方を隔てている巨大な亀裂が、それだけいっそう決定的に口を開けることになるからにはほかならない<sup>22)</sup>。』『優美と品位について』(1793)の時点では、ゲーテとシラーの思想の間には相容れることなき根本的不一致がみられるのであった。

しかしながら、シラーは『優美と品位について』では軽蔑に近い調子で繰り返し「単なる自然」という言葉を用いているのであるが、ゲーテとの交友の後に執筆された『美的書簡』では自然に対する肯定的見解が随所に見られ、この理念がテキスト全体を貫いている。ここにおいて自然概念に対するシラーの見解が大きく転回したことが明らかに見とれるのである。シラーの態度のこうした変転をゲーテは、自分への友愛の情として解釈する。「彼 [シラー註：筆者] は自由の福音を説き、私は自然の諸権利を制限されたくないと考えていた。おそらく彼自身の確信からというよりも、むしろ私 [ゲーテ註：筆者] にたいする友愛の気持から、彼は例の『美的書簡』のなかでよき母なる自然を以前の厳しい調子では扱わなかったものであろう。『優美と品位について』の論文に見られた表現はかねがね私の嫌っていたところだからである<sup>23)</sup>。』『優美と品位について』と『美的書簡』の間では、ゲーテの影響により、シラー思想の質的転換が生じているのである。

『優美と品位について』から『美的書簡』へのシラーの思想的変遷を詳述することが本研究の課題ではないので、ここでは、シラーがゲーテとの交流によって彼の美学思想を修正したこと、ゲーテへの歩み寄りをみせたことを指摘するに留める。

本論文では以下、『美的書簡』のうちに具体像とし

てのゲーテが描き出されているという事実を前提に据えて分析を行い、シラーが念頭に置いた具体像＝ゲーテに『美的書簡』の抽象概念を還流させたい。「『美的書簡』は「ゲーテの肖像」である」というシラーの告白は、『美的書簡』への言及の際、しばしば引き合いに出されるものの、それらの言及において、ではいかなる意味で『美的書簡』がゲーテを描き出したものだと言えるのか、解説はなされない<sup>24)</sup>。以下の論考では、とりわけ『美的書簡』の重要概念、「遊戯衝動」の内実の解明を試みるが、まずはその予備的考察として、「遊戯衝動」に関し、いかなる説明がなされていたか、『美的書簡』で展開された彼の衝動論を概観することによって確認したい。

#### 4. 「遊戯衝動」とは——感性的衝動と形式衝動の統合としての「遊戯衝動」

シラーは『美的書簡』において人間の根本的衝動として、感性的衝動 (der sinnliche Trieb) と形式衝動 (der Formtrieb) の二衝動を提示する。感性的衝動と形式衝動、両衝動の性質は対極的である。シラー自身、「これ以上相対立するものもない<sup>25)</sup>」と述べ、差異を際立たせるべく、両者を対比的に論じている。第一の相違は両衝動の向かう対象の相違である。感性的衝動と形式衝動は、それぞれ認識においては、前者は事物の現実性に、後者はその必然性に関係し、行為においては、前者は生命の維持に、後者は尊厳の維持に向かうという。

両衝動の相違は第二に時間軸の観点で示される。感性的衝動については、「人間の身体的存在、すなわちその感性的本性に発し、人間を時間の枠のなかへ置き、質量とするはたらき<sup>26)</sup>」をすと述べられ、「ここでは質量は変化ないし時間をみだす実在性<sup>27)</sup>」にほかならず、この衝動は変化が存在し、時間が内容をもつことを要求する<sup>28)</sup>。一方、形式衝動は、「現在決定するとおなじように永久にわたっても決定するのであり、永久にわたって命じるものを現在命じ<sup>29)</sup>」、時間の全系列を包含し、「時間を廃棄し、変化を廃棄する<sup>30)</sup>」という。両者はそれぞれ前者が変化(時間)、後者が不変(無時間)の世界に属するのである。

第三の相違は両者の作動領域の相違である。各々の活動領域を示す箇所を見てみよう。

「感性的衝動は、上昇を目ざす精神を、断ちきりが

たい絆で感性の世界 (Sinnenwelt) に縛りつけ、無限の世界へきわめて自由にさすらう抽象作用を、現在の限界のなかへ呼び戻します<sup>31)</sup>」

ここでは感性的衝動の活動領域を「感性界」と呼ぶことにする。一方、形式衝動についてシラーは、次のように述べる。

「形式衝動が支配しているところでは、また純粋な客観が私たちの中で行動するときには、そこには存在の最高の拡張があり、そのときはすべての限界が消え、乏しい感性が彼を限定していた一つの大きさの統一体から、現象のすべての国を眼下にとらえる理念の統一体へと、人は高められているのです<sup>32)</sup>」

形式衝動は、「現象のすべての国」、すなわち「感性界」を「眼下にとらえる」ものである。つまり、「感性界」とは異なる領域で作動するのが形式衝動である。感性的衝動と形式衝動は互いに別領域で作動するものであり、同一の領域で矛盾するものではない。ここでは「感性界」と異なる原理に基づくもう一つの世界を「形式界」と呼ぶことにする。(シラーは「感性界」とは相反する原理に基づく世界を「道徳界 (moralische Welt)」、「叡智界 (intelligibele Welt)」、「理念界 (Ideenwelt)」などと呼び、呼び名を統一させていない。ここではシラー独自の意味を際立たせるため、彼自身がそう呼んでいるわけではないが、形式衝動の作動する世界を「形式界」としたい。)

さらに、『美的書簡』、第9書簡における「形式」に関するシラーの記述は、シラーのいう「形式」が「デモーニッシュ (dämonisch)」な側面を有することを窺わせる。

「彼 [芸術家 註：筆者] は、質料は現代から取るでしょうが、形式は [...] あらゆる時代の彼方、自己の本質の絶対不易の統一から取ってくるでしょう。美の泉は彼のデモーニッシュな本性の純粋エーテルから流れ出るのであって、底に濁って渦巻く人類や時代の腐敗には感染していません。その質料は気紛れなまにまに敬われたり、辱められたりするでしょうが、純粋な形式はそんな変転を免れています<sup>33)</sup>」

『美的書簡』において想定されている「形式」は絶対不変であると同時に「デモーニッシュ」な要素を含み持ち、エーテル状のものとされるのだ。

さて、感性的衝動と形式衝動は、この上なく相対立するため、論理的に考えて、両者の統合などお



そ不可能であるかに思われるが、シラーは両衝動の融合状態を認め、これを「遊戯衝動 (Spieltrieb)」と名付ける。「遊戯衝動」は、「時を時のなかで廃棄し、生成を絶対的存在に、変化を同一性に結びつけるようにむけられるもの<sup>34)</sup>」とされ、一切の偶然性を廃棄し、また一切の強制を廃棄し、人間を自然的にも道徳的にも自由にする<sup>35)</sup>という。そうした「遊戯衝動」の作動状態は「生ける形態 (lebende Gestalt)」、 「中間状態 (mittlerer Zustand)」などと呼ばれる。

下の図 (図1) はシラー衝動論における、三衝動の関係を図式化したものである。この図式において、上の円が「感性界」、下の円が「形式界」を示している。両世界はそれぞれ独立した世界であり、「感性界」において感性的衝動が、「形式界」において形式衝動が作動する。「遊戯衝動」の作動状態は図式では両世界の同時成立、すなわち循環・交流として示される。(次節でも登場するこの図式を、本論文では二元循環図式と呼ぶことにする。)

以上、本節においてシラーの衝動論、「遊戯衝動」に関する記述を概観し、これを図式化した。「遊戯衝動」に関するシラーの記述は、抽象的にすぎるため、解釈の多様化は当然避けられない。次節では、愈々、本研究の課題、抽象概念たる「遊戯衝動」の具体化を試みたい。本節で抽出した「二元循環図式」の構図を具体像のうちに読み取り、「遊戯衝動」の内実を明らかにすることが次節の課題である。

## 5. 「遊戯衝動」の具象化——ゲーテ『ヘルマンとドロテア』における「遊戯衝動」の顕現

さて、「ゲーテ—シラー往復書簡」におけるシラーの告白 (『美的書簡』は「ゲーテの肖像」である) を手掛かりに、この前提に依拠した分析を行う上で、本論文ではゲーテの文学作品をゲーテ自身と不可分のものと捉え、そのうちに『美的書簡』と同一の思想を読み解き、本研究の課題 (「遊戯衝動」の具象化) に応えたい。すなわち本節では、『美的書簡』に対し、ゲーテの文学作品 (彼の自伝や書簡、自然科学論文ではなく) の対置を試みるが、具体的な分析に移る前に、その方法論の妥当性をディルタイのゲーテ研究により裏付けたい。ディルタイは、『体験と創作』におけるゲーテ分析の中で「ゲーテは、生活をそれ自身の中から理解し、かくして生活にその意義と美をもたせて表現するという創作の最高課題を解決した。詩人の天賦はかれにあっては、その生活そのものの中にすでに作用していたある創造的な威力の最高の発現たるにすぎない。生活と形成と詩作とは、かれにあっては学問的な研究に基礎を有する新しい一つの連関になる<sup>36)</sup>」と論じる。「どの作品を見ても、ゲーテ自身は自分で作ったいろいろの人物の真ん中に立っている<sup>37)</sup>」のであり、「ゲーテの作品はわれわれをつねに、その中でわれわれに話しかけている偉大なる人間 (ゲーテ) にまで溯らしめる。その作品はいずれも、その中に現れている (ゲーテの) 人格を考えさせる<sup>38)</sup>」。つまり、ゲーテにおいては生活と

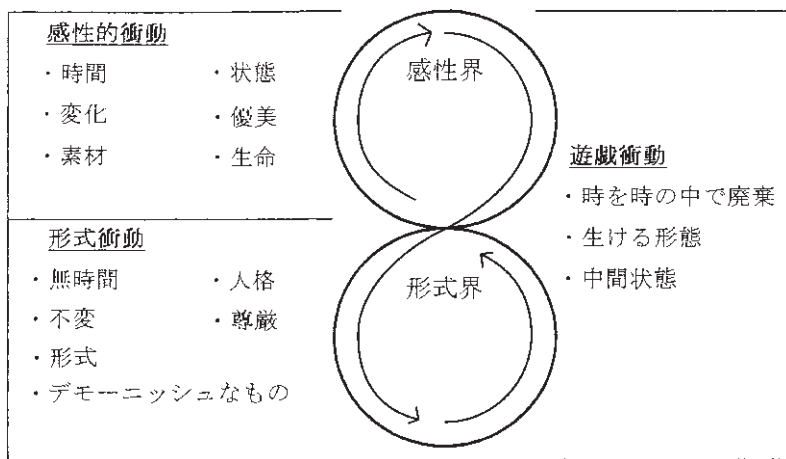


図1 『美的書簡』衝動論の関係 (二元循環図式)

創作は不可分であるというのだ<sup>39)</sup>。ディルタイのゲーテ分析を論拠とするならば、ゲーテの文学作品のうちに、彼の内面の顕現を見て取ることは一つの方法論として可能となるだろう。本研究では、ディルタイの提起に依拠して、ゲーテの文学作品をゲーテ自身と不可分のものとして位置づけ、そのうちに『美的書簡』と同一の思想を読み取りたい。尤も『美的書簡』とゲーテ文学、両者の連関は、既にディルタイのシラー論において示唆されている。彼は『美的書簡』と『ファウスト』の思想的類縁性について<sup>40)</sup>次のように論じる。「感性的人間を理性的とする唯一の方法は、この人間をまず美的人間にすることである」という『美的書簡』の一節に関し、ディルタイは、「ゲーテは、これらの観念によって、ファウストに統一の関連をあたえ、補遺的にファウストを發展せしめ、かくしてファウストを人間、否人類そのものの代表たらしめるための手段とした」とし、『『ファウスト』のもつ力と底知れぬ深奥さの一部は、まさしく特殊な状態を表現するファウストの諸断片が、この普遍的、人間的なるものと結びついている点にある」という。さらに「いまやヘレナとの結婚は、ファウストの發展における必然的な一段階となった。彼は、この段階から出発して、普遍的なもののための実践的活動を始めるのである。彼に内在する無限の努力は、この最高段階において成就される」と述べ、シラーは「この同じ観念から出発して、人間社会における芸術家の機能の意義を認めたが、それは彼が最初であった」と指摘する。そしてディルタイは以下の結論を導く。

「こうして、芸術家の自覚は、無限に昂揚した。人間性にとって、ゲーテの詩とシラーの思惟は、分離しがたい一全体となった。世界は、いまや始めて芸術が世界自身にとっていかなる意義を有するかを知った<sup>41)</sup>」

ディルタイは『ファウスト』と『美的書簡』に通底する思想を読み取り、両者を「分離しがたい一全体」と関係づけたのである。しかしながら、ディルタイの分析(及び註に記した、ユング、シュタイナーの分析)はあくまでも観念的次元にとどまるものであり(そうした分析が『美的書簡』の抽象概念を具象化することを意図したわけではないがゆえに当然ではあるが)、『美的書簡』の思想を具体像のうちに描き出すという本研究の課題に応えるには至っていない。そこで本研究では、ゲーテの代表的叙事詩『ヘ

ルマンとドロテア』をもって「遊戯衝動」の具象化を試みる。数あるゲーテ作品のうち、本稿において『ヘルマンとドロテア』を分析対象とする理由としては、第一に『ヘルマンとドロテア』の成立が『美的書簡』と同時期であること(『美的書簡』発表の翌々年(1797)に発表された)、第二にシラー自身が『ヘルマンとドロテア』をゲーテの頂点とみなしていること<sup>42)</sup>、第三に『ヘルマンとドロテア』が小品であるため、構図の抽出が大作に比して容易であるということ、第四に『ヘルマンとドロテア』のうちに描かれる世界が、小市民的生活であること(これは「遊戯衝動」の作動状態が我々の日常において見て取れる状態であり、限られた人間のうちにのみ見られる特殊な状態ではないことを示すことに寄与する。)が挙げられる。こうした理由により、『ヘルマンとドロテア』は、「遊戯衝動」の具体的顕現を見て取るには条件的に恵まれたものと言えるのである。また、『ヘルマンとドロテア』に対してはゲーテ自身、深い愛情を示しており、エッカーマンに「比較的大きい詩の中で、いまだに私に気に入っているほとんど唯一のもの<sup>43)</sup>」と語り、「読むたびに、心から共感を覚える<sup>44)</sup>」と述べる。ゲーテ自身愛し、シラーをして「ゲーテの頂点」と言わしめた『ヘルマンとドロテア』のうちに、以下、「遊戯衝動」の顕現を見出したい。なお『ヘルマンとドロテア』本文からの引用の多くは物語の骨格を強調するため、註にまわすことにした。従って物語におけるゲーテの具体的描写は註で示している。適宜参照されたい。

『ヘルマンとドロテア』は、平和な小都会の近くを、革命の動乱を逃れて移動する哀れな避難民の群れが通過し、これに同情した町のある富裕な夫婦が、息子に避難民への施しを持たせて遣いにやる場面から幕が上がる。夫妻が家の戸口で牧師や薬屋と話をしているところへ、避難民に衣類や食料を届けに行った息子のヘルマンが馬車で戻ってくる。彼は避難民の中にドロテアという伶俐そうな娘を見て、持物の一切の分配を彼女に任せてきたのである。

『ヘルマンとドロテア』はその構造のうちに二つの相反する世界を内在させている。一方が果実や穀物の稔り豊かに起伏する絵画的な町、そこで営まれる平和で秩序ある生活であり、もう一方がその町の傍らを敵兵に追われ、痛々しい姿で通過して行く避難民の群れの混乱の生活である。前者ではヘルマンが、後者ではドロテアがそれぞれ対比的な立場に



挿絵 1

において描かれる。自然の恵みを受け、調和的な生活を送るヘルマンは、避難民の群れに施しを与えに行った際、住む家もなく流浪しつつも、その困難な状況下で毅然たる態度を保ち、皆のためにかいがいしく働くドロテアに出会う。この出会いはヘルマンにとって決定的なものとなり、彼は一瞬にして彼女の魅力に捉えられる。家に戻ったヘルマンはドロテアへの思いを胸に秘めつつ、結婚に対する願望を家族に打ち明ける。ところが父は彼に資産家の娘との結婚を強要したため、ヘルマンはこれに猛烈に反発し、家を飛び出してしまう。母がヘルマンの身を案じて後を追うと、彼は町を背にして小山の上の梨の大木の下に腰掛け、遠方を眺めていた<sup>45)</sup>。

この梨の木が物語においては、ヘルマンの住む調和的な市民生活とドロテアの属する苦難と激動の避難生活を分つ境界であると考えられる。ドロテアとの出会いによって、調和的世界の住人であったヘルマンは激動の世界へと駆り立てられる。ヘルマンは今や市民生活に背を向け、激動の避難生活においてもなお、毅然たる態度で立ち向かうドロテアに思いを馳せる(挿絵 1<sup>46)</sup>)。すなわち、調和的生活と避難生活の狭間に梨の木は立っているのである。

ヘルマンを追ってやってきた母に対し、彼は、ドロテアへの思いを告白することもできず、軍隊に入り、国を守りたいと告げる。国のために身を捧げることを宣言するそのようなヘルマンの言動に対し、ヘルマンの母は瞬時に彼の本心を見抜く。本心を言い当てられたヘルマンは母にドロテアへの思いを打ち明ける。

さてここまでで、『美的書簡』と『ヘルマンとドロテア』の構造的類似を示そうと思う。二元循環図

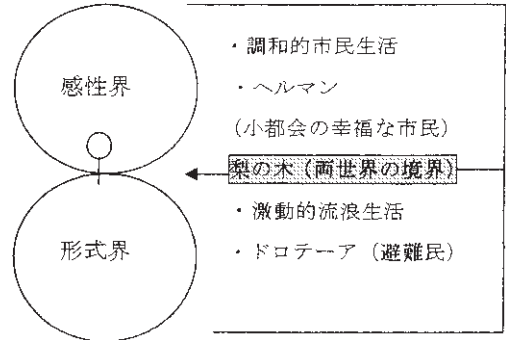


図 2 『ヘルマンとドロテア』関係図式

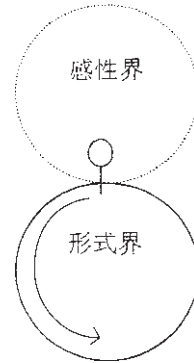
式をここでも思い起こしてほしい。図式において、梨の木は二つの円の交点に位置する(図 2)。

二元循環図式に『ヘルマンとドロテア』の構図を重ねあわせるならば、ヘルマンの住む調和的世界が「感性界」、ドロテアの属する避難民の激動の世界が「形式界」ということになる。避難民を率いる長老(物語の中盤で登場する)に、ゲータはヨシュア、モーセの姿を見ており<sup>47)</sup>、困難な状況に毅然として立ち向かう姿のうちに「感性界」における幸福原理を脱した姿が描かれ、現象界からの飛翔を見取ることができる。調和的世界を捨て、国のために入隊しようとするヘルマンの心は、今や「形式界」へと向かう。いかなる状況にも屈することなきドロテアの振舞いのうちには、『美的書簡』における「形式衝動」が描かれる。ヘルマンはドロテアによって駆り立てられた「形式衝動」によって「感性界」を捨て、「形式界」へと身を投じようとする。

ヘルマンと母親は丘をおりて父と再び話をし、友人である薬屋の提案で牧師と一緒に娘の身の上を探ることになる。こうしてヘルマン、牧師、薬屋の三名が馬車で避難民の群れを追うこととなる。牧師、薬屋は避難民の群れが滞在する村で避難民を率いる長老と話をし、そこで偶然ドロテアの勇姿が長老の口から語られる。ドロテアは敗走兵の一味に襲われた際、これに果敢に立ち向かい、刀で斬りつけて撃退し、彼女とともにいた少女達を守ったというのである<sup>48)</sup>。ここでは、長老の言葉によって、ドロテアのうちに現れる「形式衝動」の、「デモーニッシュ」な側面が強調される。一方、牧師、薬屋と別れたヘルマンは、偶然、水を汲みに来ていたドロテアと泉で再会する。二人は泉を水鏡として、水面で顔を見合わず<sup>49)</sup>(挿絵 2)。



挿絵 2



ここにおいて、「感性界」のヘルマンと「形式界」のドロテアの融合の可能性が開かれるのである。こうして、相通じ合った二人は、共にヘルマンの家に向かう。そして帰る道すがら、再び「梨の木」の下に辿りつく<sup>50)</sup>(挿絵3)。図式においては、「形式界」から再び「感性界」へと向かうベクトルである。

家に辿り着き、ドロテアはヘルマンの父親に認められ、二人はようやく結ばれることとなる。結末部において、「感性界」と「形式界」の融合、「感性的衝動」と「形式衝動」の統合としての「遊戯衝動」がヘルマンのうちに描かれる。

「お前はわたしのものだ。これでわたしの物は一層わたしの物になった。心痛とともにそれを守り、心労とともに受用するのをわたしはやめて、勇気と力とで当ろうとおもう。今度であれ、将来であれ、外患のある時は、このわたしに武装させ、得物を持たせてくれるがいい。家のことや慈愛ふかい二親のお世話を引き受けるお前という者があると思えば、この胸は安心して敵に向かうよ。そして誰もがわたし

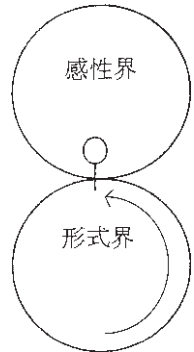
のように考えるならば、威力に威力が立ち向かい、吾々みんなは太平を楽しむことができるだろう<sup>51)</sup>」

結末におけるこのヘルマンの姿のうちに「遊戯衝動」の作動が描き出されていることは『ヘルマンとドロテア』の前年に発表されたゲーテの悲歌「アレクシスとドーラ」の一場面と比較するとより鮮烈に、対比的に示される。悲歌「アレクシスとドーラ」には互いに思いつつも、結ばれぬ男女の姿が描かれている。以下の引用はアレクシスとドーラの別れの場面である。

「お前の胸を僕の胸に感じた。素晴らしいうなじ。それを腕に抱き、ぼくは数限りなく首筋に口づけをした。お前の頭はぼくの肩にもたれかかり、お前の愛らしい両の腕もいま、幸せなぼくを抱きしめていた。ぼくはアモルの手を感じた。アモルの強い力に導かれぼくらは抱き合った。晴れわたった大空から雷鳴が三度轟いた。ぼくの中から、涙が何度もこぼれた。お前は泣いた。ぼくも泣いた。悲しみと幸せのために世界は消え失せるかに思えた。船人たちの



挿絵 3





呼び声はますます大きくなった。だが足は動かなかった。「ドーラ、お前はぼくのものだ」とぼくは叫んだ。「永遠に」とお前は小声で言った。するとぼくらの涙は神の靈氣に触れてやさしく吹き払われたかのようにだった<sup>52)</sup>」

ここにおいて二人には「感性界」における幸福原理の捨象が課される。別離の場面においてこの上ない悲しみを甘んじて受け入れる二人は、現象界を離れ「形式界」へと向かうことになる。『ヘルマンとドロテア』ではこれに対し、「感性界」が犠牲となることはない。感性的幸福も満たされ（感性的衝動の作動）、且つそれに囚われることなき（形式衝動の作動）、両者の統合状態、すなわち、「遊戯衝動」の作動が最後の場面でのヘルマンの姿のうちに描かれるのである。

以上見てきたように、『ヘルマンとドロテア』では、シラー哲学における根源的二項対立、「感性界」と「形式界」が梨の木を境に、相対立する世界の中で現れていた。そして、物語の結末において、「感性界」（＝ヘルマン）と「形式界」（＝ドロテア）は融合を果たす。この融合はヘルマンとドロテアの結婚に象徴されていた。

時系列に沿って言及するならば、「感性界」の住人ヘルマンはドロテアにより「形式界」へと導かれ、これを経て再び「感性界」へと舞い戻る。ヘルマンにとって「形式界」を経た後の「感性界」は、それを経る以前の「感性界」とは同じ世界ではない。彼の最後の台詞にも見られるように、ここには「感性界」に対する執着は見られない。しかしながら、それは「感性界」の否定、「感性界」からの脱却を意味しはしないのである。「遊戯衝動」は「感性界」に居ながらにして、「形式」を内在した衝動である（遊戯衝動は論理的に考えるならば、この意味で矛盾を孕む）といえるが、先に挙げた最終場面でのヘルマンの状態のうちには、まさにそうした状態があらわれているのであった。

以上、シラー哲学における重要概念、「遊戯衝動」をゲーテの『ヘルマンとドロテア』のうちに還流させ、具象化を試みた。論理的には矛盾として現れる「遊戯衝動」も、具体像のうちに描き出すことでその内実が鮮明に理解可能となるのである。

## 6. おわりに

本研究では、『美的書簡』の重要概念たる「遊戯衝動」を具体像（ゲーテ『ヘルマンとドロテア』）のうちに描き出すことを試みた。二元循環図式における「遊戯衝動」の作動状態は、『ヘルマンとドロテア』において、二つの相反する世界の統合として、物語クライマックスのヘルマンの姿のうちに捉えることができた。『美的書簡』と『ヘルマンとドロテア』はそれぞれ、抽象（『美的書簡』）—具体（『ヘルマンとドロテア』）と姿を異にするものの、そこから同一の構図（二元循環図式）の抽出が可能なのである。本論文において、二元循環図式を触媒にすることにより、『美的書簡』と『ヘルマンとドロテア』の構造的類似が示され、「遊戯衝動」の具現化という課題は一応の達成をみたのであった。

しかしながら、本論考においては、紙幅の都合上『ヘルマンとドロテア』という単一の文学作品に限ってこれを分析するに留まることとなった。ゲーテの他の重要な著作、とりわけその成立においてシラーからの影響も甚大であったとされる『ファウスト』、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』などのうちにも「遊戯衝動」の顕現を読み取り、『美的書簡』—ゲーテ、両者の思想的類縁性を幅広く論証する必要がある。従って、本研究の試みは以上のような問題を射程に入れることで、深化されねばならない。そうした課題を今後の課題として提示しつつ、本稿を閉じることにする。

## 註

- 1) Spranger, E.: *Erzieher zur Humanität*, In: *Eduard Spranger Gesammelte Schriften*, Bd.11, Quelle & Meyer, Heidelberg, 1972, S.232.
- 2) *Ibid.*, S.186.
- 3) 発表当時、フリードリッヒ・ニコライやフィヒテによって『美的書簡』の表現の難解さを非難する意見が述べられている。[内藤克彦:『シラーの美的教養思想—その形成と展開の軌跡—』、三修社、1999、178頁]
- 4) シラーは、ゲーテに宛てた書簡の中で「哲学すべき場合に詩人が私をせきたて、詩作したいと思うときには哲学的精神が私を責めるとというのが通例です」と告白する。[Goethe, J. W.: *Briefwechsel mit Friedrich Schiller*, Artemis Verlag, Zürich und Stuttgart, 1950, S.20. (以

- 下、Goethe, *Briefwechsel* と略記]
- 5) 長倉誠一：『人間の美的関心考』、未知谷、2003、11頁
  - 6) 同上、11頁
  - 7) 一例を挙げよう。シラーは人間のあり方を、青年時代の論文(1780年)では人間の「動物的な性質」と「精神的な性質」という術語で論じ、『優美と品位について』(1793年)では人間の「感性的な部分」と「理性的な部分」、あるいは「感性的な性質」と「理性的な性質」という言葉を用いて論じている。さらにこれらを『美的書簡』では「感性的衝動」と「形式衝動」、もしくは「質料衝動」と「形式衝動」(雑誌「ホーレン」に掲載した時には「物質衝動」と「形式衝動」という術語で表している。[前田博：『教育の本質』、玉川大学出版部、1979、145頁]
  - 8) Staiger, E.: *Friedrich Schiller*, Atlantis Verlag, Zürich, 1967, S.67. = 神代尚志他訳『フリードリヒ・シラー』、白水社、1989、70頁
  - 9) *Ibid.*, = 同上『フリードリヒ・シラー』、70頁
  - 10) 西村拓生：「<プリズム>としてのシラー『美育書簡』」、『近代教育フォーラム 第8号』、教育思想史学会、1999、138頁
  - 11) Goethe, *Briefwechsel*, S.33. = 菊池栄一訳『往復書簡 ゲーテとシルレル 上巻』、櫻井書店、1943、125頁
  - 12) Schiller, J.C.F.: *Schillers Werke Briefwechsel 1794-1795*, Nationalausgabe, Weimar, 1964, S.80. = 同上『往復書簡 ゲーテとシルレル 上巻』、132頁
  - 13) *Ibid.*, S.78. = 同上『往復書簡 ゲーテとシルレル 上巻』、126-127頁
  - 14) Goethe, *Briefwechsel*, S.33. = 同上『往復書簡 ゲーテとシルレル 上巻』、125頁
  - 15) Schiller, F.: *Briefe 1772-1795*, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 2002, S.710. 訳はハイネマン(大野俊一訳)『ゲーテ伝(三)』、岩波書店、1958、93頁より大野訳を参照した。
  - 16) Goethe, *Briefwechsel*, S.26. = 前掲訳書『往復書簡 ゲーテとシルレル 上巻』、113頁
  - 17) *Ibid.*, S.27. = 同上『往復書簡 ゲーテとシルレル 上巻』、115頁
  - 18) 『優美と品位について』から『美的書簡』に至るシラーのゲーテに対する態度の変化に対してシュタインは次のように述べる。「原理の展開は『書簡(『美的書簡 註：筆者』)』をとおして、幅と充実さ、経験の豊かさ、観照性を得て来ていることを示している。『優美と品位について』の頃にはシラーは、ゲーテに対して防衛の言葉を言わねばならぬように信じていたが、今の彼はゲーテの全てをも己のうちに採り入れているかのようである」。[Stein, H.: *Goethe und Schiller*, Reclam, Leipzig, 19--?, S.49. = 郡山千冬訳『ゲーテとシラー』、大観堂、1942、80頁]
  - 19) Schiller, J. C. F.: *Über Anmut und Würde*, In: *Sämtliche Werke*, Bd.5, Carl Hanser Verlag, München, 1980, S.457. = 新関良三編『優美と品位について』、『シラー選集(二)』、富山房、1941、142-143頁 一部改訳
  - 20) この点に関しシュタインはシラーの心情を以下のように推測する。「結局のところここには、自分が自然の寵児ではないことを感じながら、病める肉体にむちうち、運命にあらがって文章を書き綴らねばならなかった者の複雑に屈折した感情が働いているように思われる。だが、すべての言葉が自分への当てこすりであると解したゲーテは、もちろん不快を禁じ得なかった」。[Staiger, E.: *Goethe 1786-1814*, Atlantis Verlag, Zürich, 1956, S.197. = 小松原千里他訳『ゲーテ(中)』、人文書院、1981、166頁]
  - 21) 金田民夫：『シラーの芸術論』、理想社、1968、18-19頁
  - 22) Goethe, J. W.: *Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche*, Artemis Verlag, Zürich und Stuttgart, 1949, S.621. = 小岸昭他訳『ゲーテ全集 13』、潮出版社、1980、28頁
  - 23) *Schillers Persönlichkeit Urteile der Zeitgenossen und Dokumente*, gesammelt von Max Hecker und Julius Petersen, Gesellschaft der Bibliophilen, Weimar, 1909, S.20. 訳は前掲訳書『フリードリヒ・シラー』、13頁より神代訳を参照した。
  - 24) シュタイン、ハイネマン、金田、木村らはそれぞれ、著書において、「ゲーテ―シラー往復書簡」を引用するが、具体的な分析等は行われない。[Stein, *Goethe und Schiller*・Heinemann, K.: *Goethe*, Alfred Kröner, Stuttgart, 1922・金田『シラーの芸術論』・木村謹治：『ゲーテ・シルレル』、岩波書店、1937]
  - 25) Schiller, J. C. F.: *Über die ästhetische Erziehung des Menschen*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1961, S.76. = 石原達二訳『人間の美的教育について』、『美学芸術論集』所収、富山房、第十三書簡、1977、138頁 尚、本論文では石原達二訳の他に浜田正秀訳も参照した。(浜田正秀訳『人間の美的教育について―連続書簡』、『美的教育』所収、玉川大学出版部、1982)
  - 26) *Ibid.*, S.71. = 石原訳、第十二書簡、133-134頁
  - 27) *Ibid.* = 石原訳、第十二書簡、134頁
  - 28) *Ibid.* = 石原訳、第十二書簡、134頁

- 29) *Ibid.*, S.73.=石原訳、第十二書簡、136頁
- 30) *Ibid.*=石原訳、第十二書簡、136頁
- 31) *Ibid.*, S.72.=浜田訳、第十二書簡、171頁
- 32) *Ibid.*, SS.74-75.=浜田訳、第十二書簡、173頁 一部改訳
- 33) *Ibid.*, S.54.=石原訳、第九書簡、118頁
- 34) *Ibid.*, S.85.=石原訳、第十四書簡、146頁
- 35) *Ibid.*, S.86.=浜田訳、第十四書簡、181頁
- 36) Dilthey, W.: *Das Erlebnis und die Dichtung*: Lessing · Goethe · Novalis · Hölderlin, In: *Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften*, Bd.26, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 2005, S.130.=柴田治三郎訳『体験と創作 (上)』、岩波書店、1961、234頁
- 37) *Ibid.*, S.155.=同上『体験と創作 (上)』、279頁
- 38) *Ibid.*, SS.171-172.=同上『体験と創作 (上)』、307-308頁
- 39) 同様の点に関し、ジンメルも、「ゲーテにはその創造は、その体験から分離されないように思われた。何故ならば彼の体験がすでに一種の創作であったから」だと述べる。[Simmel, G.: *Goethe; Deutschlands innere Wandlung Das Problem der historischen Zeit Rembrandt*, In: *Georg Simmel Gesamtausgabe*, Bd.15, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 2003, S.31.=木村謹治訳『ゲーテ』、櫻井書店、1943、36頁]
- 40) また、同じくユングも『タイプ論』において『美的書簡』と『ファウスト』の思想的類縁性について示唆している。[Jung, C. G.: *Psychologische Typen*, Rascher, Zürich, 1967, S.132.=林道義訳『タイプ論』、みすず書房、1987、133頁] さらに、ディルタイ、ユングよりも詳細に、『美的書簡』とゲーテ思想の関連を分析したルドルフ・シュタイナーは、ゲーテ『メールヒェン』のうちに『美的書簡』と同一の思想を見出している。[Steiner, R.: *Goethes geheime Offenbarung in seinem Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach Schweiz, 1999] こうした諸々の分析はいずれも『美的書簡』に対して、ゲーテの具体的な文学作品を対置させ、両者の思想的類似を示している。
- 41) Dilthey, W.: *Dichter als Seher der Menschheit: die geplante Sammlung literarhistorischer Aufsätze von 1895*, In: *Wilhelm Dilthey Gesammelte Schriften*, Bd. 25, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 2006, S. 591.=山西英一訳『シルレル論』、河出書房、1947、51-52頁、一部改訳
- 42) ゲーテ『ヘルマンとドロテア』のうちにシラーから見たゲーテ像が結晶している可能性があることを、シラーがハインリッヒ・マイヤーに宛てた書簡が示唆している。「ゲーテの叙事詩『ヘルマンとドロテア』註：筆者」をお読みになった由、あれがゲーテの、そしてわが現代芸術全体の頂点であることをお認めになるでしょう。[Schiller, F.: *Briefe 1795-1805*, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 2002, S.300. 訳はベルショフスキ, A. (高橋義孝・佐藤正樹訳)『ゲーテ—その生涯と作品』、岩波書店、1996、746頁より、高橋・佐藤訳を参照した。] ここにはシラーの『ヘルマンとドロテア』に対する最大の評価を見て取ることができる。
- 43) Eckermann, J.: *Gespräche mit Goethe*, Artemis Verlag, Zürich und Stuttgart, 1948, S.141.=山下肇訳『ゲーテとの対話 (上)』、岩波書店、1968、178頁
- 44) *Ibid.*, S.141.=同上『ゲーテとの対話 (上)』、178頁
- 45) 「飲みちを踏んで畑の間を歩いてゆけば、梨の大き木が目に見える。小山の上には立っていて、わが家の畑の境の目に見える。誰が植えたのかは判らぬが、この境界ではどこからも見えて、評判の実をむすぶ木である。[…]母の予想は果してたがわず、ヘルマンはそこに息んでいた。母の来る方に背中を向け、頬杖をついて、山列寄りの遙か彼方を眺めているような様子であった」。  
[Goethe, J. W.: *Hermann und Dorothea* Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1976, SS.48-49. (以下Goethe, *Hermann und Dorothea*と略記) =佐藤通次訳『ヘルマンとドロテア』、岩波書店、1932、62-63頁]
- 46) 本節で使用する3枚の挿し絵は、いずれも岩波文庫版『ヘルマンとドロテア』(1932)より転載したものである。
- 47) 後の場面で牧師が、避難民を率いる長老に次のように語りかける。「わたくしにはあなた様が、遠い遠い大昔に、迷路を辿り砂漠を越えて、流浪の民を導いた士師がたの、そのお一人のように思われてなりません。どうやらヨシュアかモーセとお話している心もちです」。  
[Goethe, *Hermann und Dorothea*, S.67.=前掲訳書『ヘルマンとドロテア』、94頁]
- 48) 長老はドロテアの振舞いについて次のように語る。ここにおけるドロテアの行動のうちには「デモーニッシュなもの」をも見て取ることができる。「娘は、中のひとりの腰の刀をやにわに引き抜き、力をこめて斬りつけると、其奴は娘の足もとに血煙立てて倒れました。それから雄々しく渡り合い、目覚ましくも少女たちを救い出し、なおも四人に斬りつけたので、其奴らは命からがら逃げ出しました」。  
[*Ibid.*, S.75.=同上『ヘルマンとドロ

テア』、107頁]

49)「そして二人は井戸端に腰をおろした。娘が水を汲もうと体がかがめると、ヘルマンも別の水甕を取りあげて身がかがめる。すると、水に映る紺碧の空に二人の影のゆらめくのを見て、頷きあって親しげに水鏡の中で挨拶を交わすのであった」。[*Ibid.*, S.88.=同上『ヘルマンとドロテア』、127-128頁]

50)「ふたりはちょうど梨の木の下へやって来た。満月が暗々と下界を照らし、夜の幕が垂れこめて、夕日の余光は残りなく蔽われてしまっていた。真昼のような明るさと、暗い夜の闇の蔭とが、大きな塊であい対して、ふたりの眼前に横たわった。ヘルマンには懐かしいこの場所

の、この立派な木の下で、やさしい問いを受けるのが嬉しかった。追われゆくドロテアのためつい今日涙を流したのも、此処である」。[*Ibid.*, S.99.=同上『ヘルマンとドロテア』、146-147頁]

51) *Ibid.*, S.116-117.=同上『ヘルマンとドロテア』、176-177頁

52) Goethe, J. W. 1950: *Sämtliche Gedichte Erster Teil: Die Gedichte der Ausgabe letzter Hand*, Artemis Verlag, Zürich und Stuttgart, S.185.=訳は前掲訳書、シュタイガー(小松原千里他訳)『ゲーテ (中)』、189-190頁より小松原訳を参照した。